

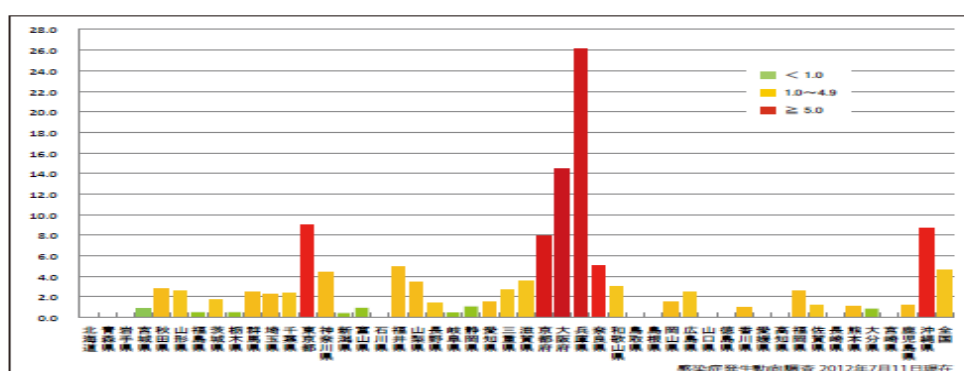
風しんが流行しています

風しんの流行はほぼ5年の周期を有し、時に大流行を繰り返しています。最近では1987年、1992年に大きい流行がみられていますが、その発生数は次第に減少傾向にありましたが、今年はすこし様子が違っているようです。

風しん患者発生状況

2月以降、兵庫県や大阪府で多くの患者数が報告されています。また、5月頃からは、首都圏、特に東京都で患者が急増しています。国立感染症研究所が発表した都道府県別の人口100万あたりの患者報告数（下図）から、奈良県は兵庫県、大阪府、東京都、沖縄県、京都府に次いで多い届出数です。

奈良県では、18週（4/30-5/6）に初めて報告があり、これまでに10名の患者が報告されています。発生地別では、郡山保健所管内が4名、葛城保健所管内が3名、奈良市が2名、桜井保健所管内が1名となっています。本県では男女比は1:1で差はありませんが、全国集計では圧倒的に男性に多く、風しんの予防接種が1995年まで女子中学生が対象で、男性は予防接種を受けていない人が多いためと考えられています。



都道府県別人口100万あたり風しん報告数

先天性風疹症候群

妊娠初期の女性が風しんにかかると胎児がウイルスに感染し、難聴、心疾患、白内障、そして精神や身体の発達の遅れ等の障害をもつ赤ちゃんが生まれる可能性があります。男女を問わずの予防接種は、これらを回避するために重要です。

ワクチンによる予防

現在は麻疹ワクチンと混合した麻疹風しん混合ワクチン（MR）が定期的な予防接種に組み込まれています。2007年から始まった10～20歳代を中心とする麻疹の全国流行を受け、2008年度から2012年度までの5年間、通常期の第1期、第2期に加えて、中学1年生（第3期）および高校3年生相当年齢者（第4期）に定期接種を受けることができるようになりました。この年齢で接種を受けると公費負担で受けることができます。詳しくは市町村または医療機関でご相談ください。

なお、過去に風しんに感染または予防接種を受け、すでに免疫を持っている方が再度接種を受けても、特別な副反応が起こるなどの問題はありませぬ。